

迎由理男／永江眞夫編著『近代福岡博多の企業者活動』

宮地，英敏
九州大学附属図書館付設記録資料館

<https://doi.org/10.15017/13895>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 24, pp.123-126, 2009-03-19. Manuscript Library, Business and Economics Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



【書評】 迎由理男／永江眞夫編著 『近代福岡博多の企業者活動』

宮 地 英 敏

本書は、一九九六（平成八年）年に武野要子氏を中心に設立された近代博多商人研究会が、会長を岡本幸雄氏に引き継ぎつつ研究会を發展させてきた（現在の研究会の名称は福岡企業者史研究会）、十年以上にわたる活動の成果の一つである。同研究会からの成果はすでに、『福岡県史』や朝日新聞西部版「続はかた学」などで発表されてきたが、本書は纏まって刊行される初の研究書でもある。

そもそも本書が対象とする福岡（市）は、黒田長政入城以前からの商人町である博多地区と、入城以後の武家町を中心とした城下町である福岡地区が、那珂川および中洲によって結ばれて成立した都市（以下、福岡と略す）である。福岡の發展にとって、福岡として一つに統一されたアイデンティティと、博多および福岡というそれぞれの地区のアイデンティティが、重層的に存在したのが福岡という都市の特徴である。本書は、このような性格を持つ福岡が、如何にして工業化・産業化の舞台となったのかということを明らかにした実証研究である。最初に各章の紹介を行い、最後に纏めて簡単なコメントを付すこととした。

第一章「企業勃興と福岡商工業者」（迎由理男）は、序章的な役割も兼ねつつ、福岡およびその企業者たちを研究史上に位置付けている。明治の經濟發展の中で、六大都市に続く都市として、広島、金沢、仙台そして福岡が台頭してくる。福岡以外の都市は軍事都市としての側面を持つっており、その点で福岡は特徴的である。また、これらは城下町としての系譜に位置づくが、明治前期には紀州徳川家の和歌山、細川家の熊本、島津家の鹿児島、蜂須賀家の徳島などよりも、福岡は小さな都市として出発していたことも見過ごせない。また、明治期の發展においては、同じ福岡県内で比較してみると、現北九州市エリア（門司、八幡、小倉、若松、戸畑）よりも近代的な産業の定着が遅れ、また筑豊の炭鉱地帯よりも資産家の形成では後塵を拝していく。これは、幕末から明治前期、そして明治中・後期へと移り変わる中で、近世来の上位商人層（舟問屋・蠟製造業者・相物問屋）が没落をし、それに続く呉服商・醸造家クラスが経営を維持して發展の主たる担い手となった時点に始まる。彼らは銀行・鉄道・炭鉱などへと出資・参加を行うが、その多くは他都市の企業

家層と比べて相対的に成功することができなかった。その具体的事例の考察を行うのが、福博に設立された企業に視点を置いた第二章から第五章と、企業家からアプローチをした第六章から第八章という構成になっている。

第二章「博多絹綿紡績株式会社の成立と展開過程」（岡本幸雄）は、絹綿紡績とは名乗るものの、技術的に製糸業の機械化が困難であったため、紡績会社として経営された会社の事例である。同社に関する研究は、筆者の岡本幸雄によって既に『地方紡績企業の成立と展開』（九州大学出版会）第八章で行われているが、本章では新資料も加えつつ、福博商人という視覚から再分析したものである。同社は、呉服太物商をはじめとした福博の繊維各種商が、発起人および株主の中核を占める。また繊維商人のネットワークを活用し、緋で名高い久留米の商人や、岡山の商人たちにまで出資を仰ぐことに成功した。しかし、会社自体の経営は、製品に競争力がなかったために九州域外へ販売するのが容易でなく、起死回生の中国大陸向け輸出も失敗し、鐘淵紡績への不利な条件での吸収合併によって、その歴史を閉じることになる。

第三章「博多電灯株式会社創立者と設立経過」（東定宣昌）は、松永安左エ門や福沢桃介の福博電灯軌道と後に合併し、博多電灯軌道という形（その後、九州電気と合併して九州電灯となる）で福博の市内電気会社として発展する企業の、源流の一社の創立を検討している。福博における電灯会社計画は、当初は「福岡くらぶ」という社交クラブを舞台に発案された。旧黒田藩士を中心に、商人、官吏、学者、医師、豪農が参加していた福岡くらぶに、工事請負を事業の一つとしていた東京電灯や東京品川電灯から働き掛けがあったためである。しかし、山笠の通り

道の関係で揉め、さらには福岡電灯という会社名に難色を示す博多商人の反対で挫折していく。しかし全国的に電灯会社が勃興すると、再び福博でも電灯会社設立の要望が高まり、今度は博多商人を中心として設立が企画された。今度も山笠の通り道で調整に手古摺るが、何とか開業へと漕ぎ着けることに成功していく。

第四章「大正期の筑前参宮鉄道株式会社と河内卯兵衛」（永江真夫）は、博多の綿糸商であり、また後に福岡市長としても活躍する河内を中心にして、吉塚から宇美八幡宮へと敷設された私鉄である筑前参宮鉄道を分析している。筆者の永江真夫には既に河内卯兵衛の家業経営や企業家活動に関する研究（福岡大学『経済学論叢』四九―三・四号）があり、本研究はその延長に位置付くものである。河内の尽力によって地方政治家、炭鉱経営者、土木請負業者などが発起人となり、また九州水力電気関係者ら福博商人も大株主として、同社は出資した。経営資金は第七章でも扱う太田清蔵系の金融機関から融資された。しかし、杜撰な計画と競合路線との関係から、経営を軌道に乗せることは困難であった。このため増資を行うことになるが、この増資引き受けに最も積極的であったのが、競合路線の博多湾鉄道も経営する太田であった。また、社内不正経理問題も発覚する。こうして河内は経営から退き、元鉄道省職員の井上正美が専門経営者となる。ただし、河内が政治家として活躍するのはこの経営失敗より後のことである。

第五章「福博の企業家と水産業」（原康記）は、水産業の近代化・大型化であるトロール船の導入に伴った会社設立の動向の中で、水産会社と福博の企業家たちの行動を考察した章である。博多港は下関・長崎両港に次ぐトロール船漁港であり、明治末頃には太田清蔵系の博多汽船漁

業と、河内卯兵衛らの福博商人による福博遠洋漁業との、二大水産企業が誕生していた。大正初頭にいたると供給過剰および海底保護区域の設置を受けて、両社合併して博多遠洋漁業となり、同じく福博商人が設立していた共同製氷も買収した。しかし、第一次世界大戦ブームになると、船舶価格の上昇を受けて船舶をすべて売却し、そのまま会社は解散してしまう。そして、大戦後に再び太田清蔵を中心として、福博商人が経営者・株主に名前を連ねる博多トロールが設立される。同社の経営は比較的順調であったが、魚価下落や船舶遭難などの危機も時々発生するため、最終的には大手の共同漁業の買収を受け入れることとなった。

第六章「明治期渡辺家の企業者活動」（岡本幸雄）は、福岡市天神の渡辺通に名を残す渡辺家（紙与）に関する分析である。渡辺家は近世来呉服太物商として活躍し、明治十年代に綿糸商活動も始めた。このため、綿糸布を中心とした繊維製品の商売が、近代以降も本業の位置を占める。綿糸取引は岡山の玉島紡、岡山紡、倉紡などから仕入れ、久留米緋向けの販売を行っていた（これが第二章の出資に繋がる）。また綿布をはじめとした織物は、関西地方から仕入れて九州で販売していた。しかし渡辺家ではこの本業以外に、非常に多くの投資や経営参加を行っている。株式投資では、岡山や九州の紡績会社といった本業に付随する企業をはじめ、鉄道、金融、ガス、食品などの全国銘柄や、国債や関西方面の地方債なども見られる。このうち鉄道への興味は高かったようで、博多湾鉄道への経営および投資にも名前を連ねる。不動産投資や貸家経営、地主経営も渡辺家を支えた。また、失敗した事業として舟石炭鉱が紹介される。以上のような渡辺家であるが、一族の分家や番頭格の別家において、本家との家業競合を禁じたり、本家の非常時に救済を約束させるな

ど、近世の商家との類似性の高さが抽出された。

第七章「太田清蔵の企業者活動」（迎由理男）は、他章でもたびたび登場する四代目太田清蔵が考察対象である。太田家は油の製造と問屋および貸金業の二つを家業とする商家であり、分家から養子に入った四代目太田清蔵は、明治初期には他業種への事業拡大を図るものの失敗に終わった。しかし太田は、この時期に政財界活動には成功し、その影響力を背景に明治後期から大正期にかけて事業を拡大していく。その契機となったのが福岡での十七銀行・福岡貯蓄銀行の破綻と、東京での徴兵保険会社の行き詰まりである。太田はこの双方の再建にかかわることになる。前者では福岡貯蓄銀行を引き継いで福岡銀行を設立し、積極的な支店網と産業金融によって拡大した。また、後者では在郷軍人会を通じて活動で成功を収め、有価証券投資と預金を使い分けて経営を安定させた。この両社はまた、太田系の企業に対する機関銀行として機能した点でも共通するが、太田系企業はいずれも芳しい業績を上げることができず、福博において最も成功した太田清蔵であっても企業家としては限界が見られたのである。

第八章「田中丸家の企業者活動」（合力理可夫）は、小城出身の呉服商でありながら、博多に百貨店玉屋を設立することになる外様商人を分析している。田中丸家の本家である善蔵家は、久留米緋などに加えて日用雑貨も取り扱っていたが、佐世保の海軍工廠従業員購買組合との間に一手引受を結んだことで経営を拡大する。明治三十年代初めには佐賀県内ではトップ、福博商人と比較しても遜色のない経営規模の呉服商に成長していた。明治末年には合名会社の形態をとり、投資活動を通じて事業の多角化に乗り出していく。佐世保商人とともに魚市場を、久留米緋

商の国武喜次郎と呉服店を、福博商人とは九州板紙を、川崎八右衛門や茂木七郎右衛門に働きかけて南洋貿易をと、かなり手広く事業を手掛けていた。こうした中で、本業である呉服店および各種事業の発展として百貨店経営にも乗り出す。しかし佐世保の一号店に続く福博への出店は遅れ、伊藤長商店から営業権を譲り受け、紙与呉服店（第六章）の全商品と従業員を引き継ぐことで、ようやくと福博初のデパートである玉屋百貨店の開業に漕ぎ着けることができた。

以上、簡単に要約を行ってきたが、最後にコメントを付すことでまとめとしたい。一つ目は、双子都市という性格を持つ特徴的な福博を対象としたにもかかわらず、第三章の一部を除き、福岡と博多の商人の関係を描くことに成功していない点に関してである。それよりも第四章の河内卯兵衛や第六章の渡辺家のような繊維商を出自とする商人たちと、第七章で扱われた太田清蔵を中心とするグループとの合従連衡こそが、近代福博の特徴であったように思われる。第五章の二大水産会社では、まさにこの両社がそれぞれ別個に企業設立を行っているが、また第四章では鉄道競合路線への言及があったが、このような構図は他の業種でも確認できるのではないであろうか。となると、福岡と博多という近世期に発する地域的な差は、近代にあつてどの程度の意味を持ち得たのかという点、一つ今後の重要な論点になるのではないであろうか。

二つ目は、福博の商人たちは、第一章で言及されたように、結局は企業家としては大成できなかった商人たち、という位置づけについてである。その原因に関する考察を、各章とも禁欲的に避けているのが残念であり、一読者としてはこの点に関する著者たちの見解を伺いたかった。評者が読み進めていく中で感じた点を問題提起として挙げるならば、明

治の十年代から二十年代にかけての企業勃興に前後した時期に、福博商人たちが炭鉱業に触手を伸ばして失敗してしまったことが重要ではないであろうか。明治初めの福博商人たちは、他都市の商人たちと比較しても、決して企業家精神に欠けた人物たちではない。というよりも、企業家精神にあふれ、果敢に筑豊の炭鉱事業に参入して、そこで大きな痛手を被ってしまった結果、他都市の企業勃興の担い手たちに比べて限界があつたのではないであろうか。第八章にあるように、近代の福博は呉服太物商たちが中心でありながら、初のデパートを他都市からの参入で設立されてしまったのは象徴的である。

現在、福岡市は九州最大の都市として賑わいを見せている。しかしその福岡はかつて、企業勃興の波に十分に乗り切ることができず、炭鉱業で繁栄を謳歌する筑豊地域や、工業化の最前線を走っていた現北九州市域の陰に隠れていた。そのために、福博に関する研究はまだまだ緒に就いたばかりである。福博企業者史研究会のメンバーをはじめとして、近代の福博に関する研究が今後一層進展することを願ってやまない。

（九州大学出版会、二〇〇七年、三〇〇+x頁、三八〇〇円〔税別〕）